

## 幕末期、五戸で起こった

百姓一揆

中野渡 一耕

(青森県文化財保護協会  
常任理事)

五戸町では、弘前大学に委託して2023(令和5)年から同町中市(旧倉石村)に居住した所給人(ところきゅうにん・代官所付の藩士)円子(まるこ)家の古文書調査を実施している。



円子左右見が勤務した五戸代官所(推定復原されたもの)=2025(令和7)年6月22日・筆者撮影

筆者もそのメンバーに加わらせていただいているが、その中から、幕末の1853(嘉永6)年に起こった一揆の記録を紹介しよう。当時、円子家当主左右見(そうみ)は、五戸代官所で、宿場の取締役である「駅所締役」を勤めていたが、その日記(駅所吟味御用日記)中に一揆の経緯が記されている。

現在の青森県東部や岩手県中北部を領地とした盛岡藩は、全国有数の一揆多発地帯であった。特に1853年は、藩最大の一揆である三閉伊(さんへい)(現岩手県宮古・釜石地方)一揆を始め、各地で一揆が起こった当たり年であった。

同年は不作の年だったが、藩は御用金の徴収や、新たな税の取り立てを強行し、これらに対する反発が引き金となったものである。現在

の青森県域でも例外ではなく、五戸周辺や、下北の川内(現むつ市)で一揆が起こっている。

左右見の日記によると、同年7月11日、税の上納方式の変更に反発した百姓たちが、一揆を企て、五戸白山平に3,400人が集結した。彼らは上納方式の撤回をはじめとした17か条の要求を掲げ、当地方の中心地であった三戸に向かった。

代官所役人たちが説得した結果、同19日に村の代表者である肝入や老名ら97名が三戸に逗留し、藩の回答を待つことになった。やがて要求のほとんどが認められ、決着した。まずは成功した一揆と言ってよい。

左右見は宿場の取締役として、奥州街道を通過する人々の治安を維持する役目があった。彼は一揆勢に先だって三戸に赴き、三戸代官と善後策について協議した後、五戸に戻った。休む間もなく、その日の夜八時半(午前3時頃)に伝法寺宿(現十和田市)に向かった。

七戸でも盛岡城下へ直訴に向かう動きがあり、それを阻止するため、五戸への入り口である伝法寺で警護にあたったのである。七戸の百姓は

実際に来ることはなかったが、他の資料によると、田子(現田子町)の百姓が数百人で斗内村(現三戸町)まで押し寄せた。百姓たちは続々と呼応していったのである。

五戸や三戸地方で一揆が起こるのは、この時が初めてではなく、天保年間(1830年代)にも騒動が起こっている。盛岡藩で一揆が多かったのは諸説あるが、寒冷地のため米穀だけに依存できず、海産物や鉄、大豆など様々な特産物に税を頼らざるを得ない経済体制が一因になったと言われている。

一揆を受けて一時的に百姓の要求を受け入れたとしても、しばらくすると旧に復し、また一揆が起こる、というパターンが続いた。同じ寒冷地でも、米穀収入が多かった弘前藩では、あまり一揆は発生していない(その例外として1813(文化10)年の、いわゆる民次郎一揆がある)。一方、盛岡藩と同じような経済体制だった八戸藩も、1834(天保5)年に岩手県久慈地方を中心に大一揆が起こっている。

円子家の日記には、まさに当事者ならではの臨場感があり、一揆の様子を伝えてくれる。